

第 6 章 幼少期Ⅲ：1947 年頃～1949 年頃（10～12 歳）

ぐれてタレブに折檻される



中央奥の塔（ミナレット）：アウレフの町のモスクの一つ（2002 年記者撮影）

思春期に入った頃だったが、一時悪い仲間に入ったことがあった。隣の地区の不良グループが私にちょっかいを出してきたのである。彼らは全く自由に、親に叱られることなど恐れずに、したいことをしていた。私はそれを勇気だと勘違いし、彼らをかっこいいと思って、行動を共にするようになった。そして、時々コーラン学校を休むようになり、その頻度は次第に増して行った。タレブが私に休んだ訳を聞くと、父に家の手伝いをするよう言いつけられたとかなんとか嘘をでっち上げた。私は、次第に巧みに嘘をつくようになった。

私は、この自由が心地よくなり、一週間全然学校に行かないようになった。しかし、うわさはすぐ広まった。子供も女たちも、そして男たちさえも、一体どうしたのかと私のことを噂した。私が学校に行っていないことは、すぐに父の知るところとなった。ただ一人の息子の非行を知り、父は怒り心頭に達した。ある日の朝、獰猛な獣のように怒り狂って、父は私を探しに出かけた。私は悪い仲間と道で遊んでいたが、ふと視線を上げると、父がまっしぐらに私に向かって駆けてくるのが見えた。手にはザクロの木の枝が握られていた。私は恐怖で固まってしまい、まるで足に根が生えたように一歩も動けなかった。父は、一言も発せず、鷲が獲物に嘴を突き立てるように、私の額を手にした枝で打った。私は悲鳴を上げた。父は何かを言いながら、もう一度私を打った。私は走って逃げたが、父の足は私よりはるかに速かった。

「すぐコーラン学校へ行くんだ！」

学校までの長い道のり、何人かの女や男たちとすれちがい、彼らは「ゆるしてやれ、モハメッド」などと言って私を助けてくれようとしたが、何者も父の怒りを鎮めることはできなかった。私は何度か躓いて転んだが、父は私の首根っこをつかんで立たせ、その上ザクロの枝の鞭で私を叩いて急がせた。学校ではタレブの周りで、生徒たちが書字版を膝に乗せて勉強していた。全員が息をのんで私と父を見た。父はタレブに言った。

「こいつはもう私の息子ではありません！閉じ込めて厳しい罰を与えてください！」

タレブは左手で私の腕をつかみ、右手に持っていた鞭で私を何回か打った。私の悲鳴はそこいら中に木霊した。しかし、これで全てが終わった訳ではなかった。タレブは「トゥング」(tonguet) と呼ばれる部屋へ私を引きずって行った。そこには、先を輪にした縄が天井から吊るされており、タレブと父は私を抱え上げて、私の手をその輪に通した。体の重みで縄が引き下げられると、輪が締まって手は抜けなくなった。そして私は尻を何回も鞭打たれた。

「もっと、もっと打ってください」

父はそうタレブに言い、学校仲間の見つめる中、私はヤギのように悲鳴を上げ続けた。しかし、子供たちは、このめったにない見世物にむしろ喜んでいたようだ。年少の子らにとっては、このようなお仕置きを見るのは初めての機会だった。なお、これは、正当な理由もないのに学校をさぼる者には同じ罰が待っているぞという見せしめでもあった。

「いっそ、足の下で火を燃やして火あぶりにしてやってもいいくらいだ！」と父は叫んだが、私は父が本気と思って縮みあがった。鞭打ちの刑が終わった後も、時々、生徒が一人二人と連れ立って、まだ私が吊るされたままかどうか覗きに來た。確かに、罰を受けているのが自分でさえなければ子供にとっては面白い見世物だったと思う。私は一人置き去りにされて、しばらくの間恐ろしく苦しい時を過ごした。私が泣きわめき続けたので、モスクの近くに住む女たちが心配して、何事かと見にやっけて來た。その頃には他の生徒はもう帰ってしまっていた。

どれほど時間が経った頃だろうか、タレブが再びやっけてきた。その手になにも持っていないのを見て、私は、また鞭打ちに來たのではないことを悟りほっとした。

「まあ、なんていい恰好だろう」とタレブは言った。

「手がとても痛いんです。降ろしてください！」と私は頼んだ。

「いいだろう。ただし、二度と同じ過ちは繰り返さないと約束できるか？」

「もちろんです。朝は誰よりも早く來て、そして、帰りは最後まで残って、書字版に書いたものを暗記しきるようにがんばります！」

タレブが私の両脇を持ち上げたくれたので、私は縄から手を抜いた。そして、1メートルほどの高さからドスンと床に着地した。

「ここで座って待っていなさい」とタレブは穏やかな声で言った。しばらく待っていると彼は戻って來て、私に付いてくるよう言った。そして私を自分の家へ連れていくと、台所の隅に座っていなさい、と言った。タレブが彼の妻と話しているのが聞こえたが、意味まではよく分からなかった。奥さんは私のところに、デザートを入れたナツメヤシの葉の籠と

水を入れた素焼きの壺を持って来て、私に向かって言った。

「さあ息子よ、食べなさい。大丈夫、これに懲りて二度としなければいいのだから。」

空腹で喉も乾いていたので、私はデザートをみな平らげ、水も全部飲み干した。奥さんは顔を見せないようにしていたが、私は彼女のほほに涙がつたっているのに気付いた。日没後、タレブは私に再び付いてくるよう言い、私を私の家へ連れて行った。父と母は中庭の真ん中に座っていた。タレブは私を自分の前に引き出すと、言った。

「神の名の下にお願いします。この子を許してやってください。」

「先生、あなた自らが、この子を連れて来て、そう頼まれるなら、受け入れない訳にはいきません。但し、こいつが二度とずる休みしないと誓うならです。」と父は応えた。

「彼は既に私に、二度と同じ過ちは繰り返さないこと、それに、これまで以上に力を尽くして勉強することを約束しましたよ。」とタレブは言った。

「いいでしょう。この子が家へ戻るのを許します。」と父は承諾した。

タレブは、ではさようなら、と言って実にあっさりと帰って行った。私は自分がどれだけバカなことをしたか身に染みていたので、何も言わずに家の隅にうずくまった。そして、夕飯を食べて寝た。

翌朝からは約束通り、いの一番でコーラン学校へ行き、決意も新たに模範的な勤勉さをもって再び学業にいそしみ始めた。一年足らずで私は、かつて従兄弟がお祝いしてもらった時と同じくらいの学力レベルに達した。しかし、誰も、従兄弟の時と同じように私にもお祝いをしようとは言うてくれなかった。私は内心いぶかしんで、毎日のように、どうして、誰も何も言うてくれないのか、と思ったものである。どうやったら、馬に乗って皆に囲まれて行進する、あの華々しい儀式をしてもえるのだろうか？従兄弟のお祝いの時、私は割礼の後で寝込んでいたので、お祝いの席には出ていないが、学校仲間から聞いてその様子は知っている。それに、実際に目にしたよりも、聞いただけのほうがかえってイメージは膨らむものである。私は想像をたくましくし、空想のその華やかな祝典のイメージが片時も頭を離れなかった。しかし実は、その頃私たち一家の暮らしは傾いており、従兄弟と同じようなお祝いを行うゆとりはなかったのである。一方、従兄弟は従兄弟で、華々しく儀式をしなければならない別の事情があった。彼は、フランス人軍人の落し胤だったので、ムスリムとしてコーランの学習が優秀なことを、ことさら誇示する必要があったのだと思う。伯母もムスリムでない男と子供をもうけたので、子供の教育では模範的でなければならなかった。しかし、そうした事情を理解してもなお、私は、どうして自分は？という思いから離れられなかった。誰か私の味方になってくれるものはいないのか？しかし、あいかわらず誰もが沈黙を守っていた。前述のように、私は 12 歳の時には、ラマダン月第 26 日目の夜の祭で、コーランの斉唱に加わるまでになっていたというのに。私は誇らしい気持ちで、いくつかの地区のモスクを回り、人々が私のことを話さないか耳をそばだてたが無駄だった。皆が私の行いの良さや能力の高さをほめそやしたが、学業成就を祝う儀式について口にする者はなかった。

私はついに耐えきれなくなり、母を問い質した。

「どうして僕には何もしてくれないの？あのお祝いの儀式はいつしてくれるの？」

「息子よ、それはお前が心を砕くに値する問題ではないのよ。大切なのは心の中に何かあるかで、眼に見えるこの世の出来事は幻でしかないのだから。神は、うわべなんて見てはくれないのよ。」

この答えは全く理に適っていて、鋭く私の胸に響いた。母の言わんとするところは私にもよく分かった。母は自分自身に言い聞かせるかのように語り続けた。ほとんど独り言のようだったが、私にもちゃんと聞き取れた。

「沢山の人が聖者の加護を求めて、その墓を詣でるけど、そこに眠る聖者だって、そのうちの何人かは本当は地獄に落ちているのよ。」

そして私に向かってはっきりと言った。

「もうそのことを考えるのはよしなさい。お前が誰の助けも必要としない、立派な大人になった時、名誉は後から自然とお前に付いて来るものです。」

無学で文盲の女の口から、どうやったらこんなに明晰で高潔な言葉が出てくるのか不思議だった。母の言葉は、真っ暗な道を照らす一筋の光のように、まぶしく私の心を照らした。その後、私は母の言葉を胸に、それまでにも増して勉強に励むようになった。

公教育への道



中学校での記念写真：中央の女性は、おそらく先生のユーゴ夫人、その後ろの左側がハジ氏と思われる。(著者提供)

ある日、コーラン学校のタレブ、ブカディ・アブダラー (Boukadi Abdellah) 師は、封をした手紙を私に渡し、誰かアルファベットが分かる人を探して住所を書いてもらい、投函してくるように言った。幾つかの商店には、普段はたいてい誰かフランス語を書ける人

がいたのだが、その日は生憎皆不在だった。仕方なく私は白いままの封筒を持って帰った。タレブは怒ったが、何を思ったのか、新しい書字版をつかむと、私を連れて、アウレフの診療所で看護師をしているモハメッド・エル・ファラーさんに会いに行った。そして、言った。

「神の名の下に、あなたにお願いします。一つ人助けをしてはもらえませんか？」

「私に何をお望みですか？」

タレブは書字版を示して説明した。

「どうかこの子供にフランス語の読み書きを教えてやって下さい。」

「いいですよ、喜んで。私が知っていることはみんな教えてあげますとも。」と、ファラーさんは快諾してくれた。

彼自身は公式の学校で教育を受けたことはなかったが、毎日医師の傍で通訳したりしているうちに、天性の語学の才能もあったのだろうが、かなり上手にフランス語を扱うようになっていた。ファラーさんは、私のために週 3 回の時間割を作ってくれた。初回のレッスンでは、私の書字版に、フランス語の数字とアルファベットを書いてみせてくれ、それぞれにアラビア語の訳も付けてくれた。彼は私に、次のレッスンに来るまでに、それらを何回も練習して暗記しておきなさいと言った。そうして 7 回ほどレッスンを繰り返した時には、彼も私のフランス語学習への意欲の高さを認めたようだった。それからは、ますます熱心に教えてくれるようになり、師と生徒の絆が自然と強まって行った。ある日ファラーさんは言った。

「次回から、フランス語の単語を教えよう。」

語彙の学習に進んだが、いきなり一つの文を扱うのではなく、まずは単語一個一個を、アラビア語の意味と共に覚えるように言われた。つまり、単語の文中での用法は後回しにされた訳だが、これがあまり効率的な方法ではないと気付いたのは、ずっと後に私自身が教師となってからのことである。

いずれにしても看護師のファラーさんは、私に沢山の知識を与えてくれた。ある日彼は、最近フランス式の学校の校舎が完成したので、授業もおっつけ始まるだろうと言った。上司の軍医も同じことを言い、開校したらすぐに申し込むように勧めてくれた。私はその日帰るとすぐ両親にこのニュースを知らせ、翌日はコーラン学校のタレブにも同じことを伝えた。これは確か 1949 年（私は 12 歳）の年末のことだったと思う。それから少し経ったある朝、私は父と農園で働いていたが、父は私を残してどこかへ出かけて行った。そして、だいぶ経ってから少々慌てふためいて戻ってきて、私に言った。

「はやく、はやく！鋤なんか置いといていいから、すぐフランス語の学校へ行って申し込んでくるんだ！もし齢を聞かれたら、12 歳だと言うんだ、いいな？」

願ってもないことで、私は急いで駆けていき、数分後にはもうユーゴさん (Hugot) のオフィスにいて、彼の前の椅子に座っていた。彼の右側には、駐留基地で通訳をしているアブダラー・エル・コジャ (Abdallah El-Khoja) さんが控えていた。私への質問が始まった。

「君の名前は？」

「アーメッド・エル・ハジ・ベン・モハメッド・ハマジです。」

「年齢はいくつだい？」

「12 歳です。」

この時ユーゴさんは多分私をもっと年長だと気付いていたと思う。しかし彼は深く詮索はせず、私の入学申し込みを受け付けてくれた。私はうれしくて、走って家へ帰った。

「上手くいったか？」父が私に聞いた。

「うん！」

「そうか、やったな！」と父も喜んだ。

後になって私が本当は 13 歳だとばれたが、私は非常に熱心な生徒で優等生だったので、皆目をつぶってくれ、おかげで学業を続けることが出来た。実際、私は不退転の決意で勉強にいそしんだので、数か月後には、学校の二人の教師、ユーゴ氏とユーゴ夫人も私の熱意を認めてくれるようになった。また、彼らが特別に目をかけてくれるのが嬉しく、段々彼ら夫婦に愛着を覚えるようになって行き、実の父母のように慕うようになった。私は学校の外のことでも、何かする時には必ず彼らに相談したものである。



最近のアウレフの高校の教室 (2002 年記者撮影)